

**日本事情クラスにおけるドキュドラマの導入とその効果**  
—社会問題への理解深化とレポート作成のための水路付け—

The Effectiveness of Using "Docudrama" to Teach Japanese Current Issues :  
Guiding Students to Deepen Their Understanding of Japanese Current Issues  
And to Write Better Essays

飯島有美子（関西国際大学）

IIJIMA Yumiko (Kansai University of international studies)

**要 旨**

本稿は、前半で、多文化理解の促進が可能で、かつ学習者の語学スキルのみならず、アカデミックスキルも多元的に向上させられる「ドキュドラマ」という手法を用いた日本事情クラスの実践を紹介する。

後半では、筆者は2009年度実践研究フォーラムにて、現職日本語教師に実際にドキュドラマを体験してもらった後、「ドキュドラマ制作・発表課題後に、扱った社会問題について、どのように学生に振り返りレポートを書かせるか」というテーマで議論を持つことができたので、報告する。

The first part of this paper introduces a practical example of course activities called 'Docudrama' implemented in 'Nihonjijo' (Japanese Language and Culture Studies for Foreign Students) class to enhance students' multicultural understanding and also to improve language skills and academic learning skills at the same time. The main focus of this paper is on how to guide students to be able to do effective reflections on their drama performing activities. Some suggestions are made based on the discussions at a round-table session at 'A practical study forum for Japanese education from the education spot 2009', where current teachers of Japanese language experienced the 'Docudrama' activity introduced by the author and had post-discussion on how to develop effective ways of reflections.

**【キーワード】** 日本事情, ドキュドラマ, 多文化理解, アカデミックスキルの向上, 振り返り

**1.はじめに**

本稿は、前半では、ドキュメンタリードラマ（以下「ドキュドラマ」と略する）という手法を用いた留学生対象の日本事情クラスでの実践を紹介する。ドキュドラマとは、事実や史実に基づいて作られたドラマであり、放送や映像の領域で使用される造語である。教育の現場で用いられるドキュドラマとは、アメリカのインディアナ大学の学部生に対するライティングやスピーチ教育を効果的に行うため、トリマーとハミルトン（2004）によって開発されたもので、ロールプレイや問題解決シナリオ作成と共通する実践でもあり、学

生があるテーマに沿って劇を作り上げる過程で、学生の経験的な学習や参加型学習が促される教育ツールである。

後半では、日本事情クラスでドキュド라마を制作・発表した後、「学生にどのように振り返りレポートを書かせるか」をめぐって、2009年度日本語教育実践フォーラムの学習活動体験型ラウンドテーブルにて議論を持ったので、それを踏まえて、振り返りの方法を考えたい。

## 2.日本事情における問題の設定

1992年までの語学教育に関する論文を分析した倉地(1996)によると、次に挙げるような三つの問題があることが指摘されている。第一に、日本文化の教育が、静態的な文化のありかたや一方的文化伝達を前提に行われていたこと、第二に、共生の理念の具現化の方法が提示されない、あるいは関心が向けられていないこと、第三に、諸学の理論の根拠や正当性の議論なしでテクニカルな方法論が採用されているということである。特に教育の方法論において、「情動的側面への気づきを促す、より体験的手法」の開発の必要性が指摘されている(横田1996,57)。

これらの課題の解決が可能なドキュド라마という手法を次に紹介したい。

## 3.ドキュド라마制作で可能なこと

### 3-1.多文化理解の促進

「日本事情」における手法は、ディスカッションやインタビューをさせる等様々なものが開発されているが、筆者はドキュド라마を作らせるという手法を採用した。

バンクスは『多文化教育』(1996)で、アメリカの学校教育において、多文化教育を行うための多様な視点を提供する際のアプローチを体系化し、その教授・学習のレベルを「貢献アプローチ(レベル1)」「付加アプローチ(レベル2)」「変換アプローチ(レベル3)」「意志決定・社会行動アプローチ(レベル4)」の4段階に分けた。

それぞれの段階の詳細な説明は割愛せざるを得ないが、本論文にとって重要な点は、情報や知識に対する学習者の関与の深さの程度である。「貢献アプローチ」と「付加アプローチ」では、提供される様々な情報は、その伝達者である教員や学校の支配的な文脈に位置づけられて学習者に受け取られる。しかし、「変換アプローチ」では、教員が情報の伝達者であることをやめ、多様な視点を学習者が発見して理解するという方法を取り、「知識を社会的に構成されたものとして理解するよう支援」し、「学習者が批判的にものごとを考え、自分自身が導き出した通則や結論を定式化し、正当化するスキルを身につけるよう教える」(同上,51)。最も高いレベルである「意思決定・社会行動的アプローチ」では、それらの概念や論点に関連した行動や活動に取り組む能力を身につけさせる(同上,52)。

ディスカッションやインタビュー等の手法は、バンクスの「変換アプローチ(レベル3)」に当たる。筆者がデザインしたドキュド라마の手法は、もう一段階上の「意志決定・社会行動的アプローチ(レベル4)」に至ることができる。ドキュド라마のシナリオの設定条件が、対立する2つの立場の人物を仲介者が解決するという結論を導かなくてはならないため、ドラマ中の事件に対して、何らかの意志決定を下す必要があるからである。

### 3-2.アカデミックスキルの向上

ドキュド라마の作成を通して、学生の日本語能力のみならず、情報収集力、論理的思考力、プレゼンテーション力等のアカデミックスキルを伸ばすことができる(表1)。

学生はシナリオを書くために、まず異なる視点からの情報を収集しなければならない(論理的思考力・情報収集力)。次はその情報や背景に合った関連人物や場面を考え、その場面から起転結<sup>(1)</sup>がある筋の通ったシナリオを書かなければならない(論理的思考力)。そのシナリオは表現が適切で効果的なセリフにしなければならない(プレゼンテーション力)。

このようにドキュド라마には、構造的に様々な課題を盛り込むことができるので、学生のスキルを多角的に伸ばすことができる。

表1 ドキュド라마作成で伸ばせるスキル

期待される教育効果	具体的な行動
情報収集力	適切な検索語が入れられる。 信頼性の高い情報が得られる。 情報を正しく理解する。
論理的思考力	収集した情報や背景に合った関連人物や場面が考えられる。 想起した場面を筋の通ったシナリオに書ける。 起転結があるシナリオが書ける。 異なった3つの立場の人物が描けている。 事件の背景が分かるようなシナリオが書ける。
本質を洞察する力	事件の根幹に関わる事柄をドラマの中で扱っている。 情報収集で、入手した情報から、より深い事柄まで調べようとする。
コミュニケーション力	グループ内で建設的に話し合うことができる。
プレゼンテーション力	テーマを効果的にドラマ・セリフにすることができる。 発表舞台上で、効果的に演じることができる。
日本語能力	読む 文献から正しく情報を得ることができる。 書く シナリオに間違いなく、自然な日本語で書ける。 聞く 他人の意見が聞ける。 話す 自分の考えを他人がわかるように言える。

## 4.実践

### 4-1.授業の概要と流れ

関西にある小規模の私立大学(二学部で構成されており、主な専攻は教育学、心理学、経営学である。学部学生は約1500人)において、2007年秋学期、留学生対象の日本事情クラスでドキュド라마制作と発表を課題として課した。

この課題は1学期間を通して取り組ませた。授業は90分授業が15回確保されている。ガイダンス、ドキュド라마制作課題の提示、グループ編成と扱う事件の選択を最初の2週

で終え、10月に情報収集を始め、ドキュドラマの設定や登場人物の選定をさせた。11月は、情報収集と並行してシナリオの執筆にあて、12月から1月にかけて、劇の練習を重ねながら学内発表会のためのリーフレット作成等の準備を行った。第14週に学内から観客を招いて成果発表会を行ったのち、その次の最終回に振り返りをさせ、自らの学びに関するレポートを作成させた。

履修者は9名で、全員が中国からの学部留学生であった。しかし内1名は、欠席が習慣化している学生で、本授業も途中で履修放棄したため、ここで言及する学生は、その学生を除いた残り8名についてである。

学年は、1年生が3名、2年生はおらず、3年生が4名、4年生が1名であった。2007年秋学期開始時点での滞日歴は、その秋来日したばかりの学生が4名、半年が1名、1年が1名、2年半が1名、4年半が1名で、学年も滞日期間もばらつきがあるが、日本語能力は全員上級レベルであった。性別は、男性5名、女性3名であった。

次に実際の授業に沿ってドキュドラマ制作の流れについて説明をする。

#### ①ドキュドラマとは何か。課題提示

初回の授業で、学生にドキュドラマとは何かを説明し、ドキュドラマ制作の課題「グループで、日本で起きた事件の背景を調べ、それを元にドキュドラマを制作し、発表会で演じる。条件は、ドラマの登場人物は3人で、それぞれ異なった立場(加害者の人物、被害者の人物、間に入る専門家的人物)にすること。上演時間は5～10分」を提示する。

#### ②グループを決め、扱う事件を決める

劇の登場人物の立場が3つあるので、グループは3、4人で構成すると指示し、学生にグループ割を決めさせる。その後、グループ毎に話し合い、教師が提示した事件のリストから、自分達の扱う事件を選ばせる。

#### ③情報収集

各グループ、図書館、インターネットを使い情報収集をさせる。視点の違う情報を最低5つ以上取らせ、背景についての理解を深めさせる。情報収集はこの後も必要に応じて行わせる。

#### ④関連人物を考える

加害者の、被害者の、間に入る専門家的の3つの立場の人物について、各最低5人以上考えさせる。

#### ⑤ケース・場面を考える

上で挙げた関連人物の組み合わせを考えながら、場面を最低5つ以上考えさせる。

#### ⑥シナリオを考える

上で考えた場面のうち、事件の問題性や背景等が反映できるものを選び、起転<sup>(2)</sup>結のあるシナリオを考えさせる。

#### ⑦演じてみる

#### ⑧シナリオの手直し

演じてみた結果、おかしいところを直させたり、より効果的に工夫させる。

#### ⑨必要な大道具・小道具を考える

ドキュドラマに必要な大道具や小道具を考え、作ったり、手配したりさせる。

⑩練習

身振りや舞台での立ち位置、発音等に注意させながら、練習させる。

⑪リーフレット作成

発表会当日、観客に配るリーフレットを作成させる。

⑫ポスター作成

発表会を告知するためのポスターを作成させる。

⑬発表会

クラス外から観客に来てもらい、発表する。各グループは発表が終わった後、観客との質疑応答を行う。

⑭振り返り

授業を通して学んだことや、考えたこと、自分の役割などについて等について、各自レポートにまとめさせる。

## 4-2.結果と考察

最終授業回に「この授業を通して学んだこと・考えたこと等」というテーマで、個人レポート（以下、最終レポートと記す）を学生に書かせた。その中の記述を分析すると、「日本文化の多様性への気付き」に言及した学生が8人中4名、「グループ内の多様性への気付きと問題解決」に言及した学生が3名、「エンゲージメント」に言及した学生が5名、「自信の獲得と意欲の向上」に言及した学生が5名、「授業形態（学生参加型）への評価」に言及した学生が6名、「スキル・知識の獲得」については4名であった。

次に学生に書かせた最終レポートと教員による観察を照らし合わせながら、ドキュドラマ制作課題によって効果が得られた2つのケースを紹介する。

〈ケース①「不二家の製品製造における不正問題」を扱ったグループ〉

**問題** 情報源は不二家のHPだけで、異なる3立場の人物をうまく設定できなかった。

**解決** 教員の指導とグループでの話し合いの結果、情報を関係省庁・法律から得てくるようになり、フランチャイズ店の損害賠償訴訟に関する記事を持ってきた。ドラマの設定を、その損害賠償訴訟にした。

**教育効果** 社会の多様性の理解・情報収集力・本質を洞察する力・論理的思考の育成と日本語能力の向上

このグループは2007年冬に菓子メーカー不二家が消費期限切れの原料を使用したという事件を扱ったが、情報源として、初めは不二家のHPと新聞記事しか考えられず、情報収集に苦労していた。そのグループの一人は最終レポートに「簡単に情報収集ができると思って、この事件を選んだが、もっと複雑ですぐ調べられなかった」（ビジネス行動学科1年、滞日2年半、男）と記述している。

その後、このグループは、教員やグループメンバーとの討論を経て、倒産したフランチャイズ店の店長が弁護士を連れ、損害賠償を求めて不二家本社の社員を訪ねるという設定のドキュドラマを制作したが、より信憑性のある情報源を発見し情報収集が進むにつれて、消費者だけでなくフランチャイズ店も被害者であり、本社で対応に当たった社員も、メー

カー不二家対フランチャイズという対立では加害者の立場になるが、上司の命令を受けて、苦情の矢面に立たなければならないという点では、被害者の立場であるという多元的で重層的な状況把握をするようになったのである。

〈ケース②「赤ちゃんポスト」を扱ったグループ〉

**問題** インターネット検索の検索語は「赤ちゃんポスト」しか考えられず、うまく情報収集できなかった。

**解決** 教員の指導とグループでの話し合いの結果、子育てを取り巻く環境・人物に関する情報が得られるようになり、複雑な要素を含む設定にした。

**教育効果** 社会の多様性の理解・情報収集力・本質を洞察する力・論理的思考の育成と日本語能力の向上

このグループは、赤ちゃんポストの設置の是非をめぐる問題を扱ったが、初めはインターネット検索の検索語を「赤ちゃんポスト」しか考えられず、その言葉が入った新聞記事等しか収集できなかった。その後、教員やグループメンバーとの討論を経て、子育てを取り巻く環境や人物に関して情報収集ができるようになった。

このグループの一人は最終レポートに「事件の背景は、自分が予想したものと違った」（ビジネス行動学科1年、滞日6か月、男）と書いている。彼はテーマを選ぶ時、「赤ちゃんを捨てるなんて許せない」とひどく怒った様子であったが、調べていくうちにやむを得ず赤ちゃんを捨てるケースを知り、背景の複雑さを知ったと書いている。最終的にドキュド라마を、夫のひどい暴力から赤ちゃんを守るために母親が赤ちゃんポストを使ったという設定にし、専門家的立場には乳児院の院長を、その母親に対立する人物には病院の看護師を設定した。この学生も、日本の社会問題の理解を深めながら、自らの価値を相対化することに成功している。

## 5. ラウンドテーブルの報告

### 5-1. 趣旨説明

筆者は前章で報告した実践に引き続き、2008年秋学期にも、同設計で授業を行い、同様の結果を得ることができた。そこで筆者は、次回の実践で最終レポートを課すにおいて、新たな試みをしたと考えた。それは、これまでの2回の実践では、最終レポートのテーマは「この授業を通して学んだこと・考えたこと等」であったが、今回は、各自が取り上げた「社会問題」そのものについての理解を書かせるというものである。

しかし、学生への指示が「自分が取り上げた社会問題について書きなさい」という漠然としたものでは、おそらく学生はドキュド라마制作を通して学んだことをうまく整理し、自らの価値を相対化することが難しいと予想され、筆者は、どのような指示でどのように水路付けをしてやればよいか悩んでいた。

そこで2009年度実践研究フォーラムの学習活動体験型ラウンドテーブルにおいて、現職日本語教師の方々に実際にドキュド라마制作・発表を体験してもらった後、最終レポートの書かせ方についての知見をいただくことにした。

## 5-2.活動概略

日時 : 2009年8月1日 9:30~12:30

目的 : ドキュドラマ制作・発表を実際に体験してもらい、学生に社会問題に関する最終レポートを書かせるための教師の具体的な指示と、それを書かせるための水路付けを考える。

参加人数 : 16名 (4名×4グループ)

内容 : 第1部 ドキュドラマの紹介

- ①本ラウンドテーブルの目的
- ②ドキュドラマとは?
- ③ドキュドラマの理論的背景
- ④ドキュドラマの効果
- ⑤ドキュドラマ制作の手順
- ⑥制作時における具体的課題への評価基準

第2部 ドキュドラマ制作・発表体験

- ①体験活動
- ②各自振り返り「本体験を通して、学んだこと・思ったこと」

第3部 議論

テーマ「社会問題に関する最終レポートを書かせる場合の、教師の具体的指示と水路付け」

## 5-3.会場からの意見

### 5-3-1.参加者の感想

ドキュドラマ制作・発表の体験後、各参加者に「本体験を通して、学んだこと・思ったこと」というテーマ（筆者が過去に学生に課したテーマと同一）で、振り返りを書いてもらった。その中の記述を分析すると、教師と学生という視点の違いはあるものの、上述の実践において学生に書かせた最終レポート同様に、「日本文化の多様性への気付き」に言及した方が16人中5名、「グループ内の多様性への気付きと問題解決」に言及した方が6名、「エンゲージメント」に言及した方が6名、「授業形態（学生参加型）への評価」に言及した方が5名、「スキル・知識の獲得」については7名であった。

その他、教師としての視点から、「グループ活動が不活発な場合における指導」や「評価方法や基準」、「初中級において導入するには？」等や、ドラマとしておもしろい展開にするために「転をどうするか」の記述が見られた。

以下に、実際のコメントを紹介する。

- ・加害者、被害者という相対する立場を考えているうちに、誰もがその両方の立場になるということに思い当たった。簡単に割り切れない社会構造への気づき。（日本文化の多様性への気付き）
- ・グループ内で同じ資料を読み、シナリオを考えていたが、それぞれ違う考えや展開を

考えていることが話し合いの中で分かり、面白かった。(グループ内の多様性への気付き)

- ・この活動に興味を持った学生は、モチベーションの高い状態で参加できる。(エンゲージメント)
- ・クリエイティビティを刺激する活動は楽しい。(授業形態への評価)
- ・一つの事件を多面的な視点からとらえようとするにより、その事件をより深く理解できるようになった。このことから、日本社会の仕組み、現代社会をおおう空気のような目に見えぬものを洞察するきっかけが得られるのではないだろうかと思った。(知識・スキルの獲得)
- ・初級にも応用したいと思うが、どんなトピックが向いているのか?
- ・講義型の授業を好む学習者がクラスにいた場合、どう参加させたら、よいのだろうか。
- ・評価はどうするのか。
- ・ドキュドラマでは「転」の部分におもしろさがあると思いました。「転」の指導は?

### 5-3-2.参加者からの「最終レポートの課し方」の提案

上述のように、授業でドキュドラマを使うと、どのような効果があるか、参加者に理解してもらった後、本ラウンドテーブルの議論の目的である「学生に、ドキュドラマで扱った社会問題に関する最終レポートを書かせる場合に、教師はどのような具体的指示文を提示し、学生がそれに到達するための水路付けはどのようにしたらよいか」について、グループ毎に話し合っ、発表してもらった。

以下に、ご提案いただいた指示文案を紹介する。

- 案1** 加害者的、被害者的要素を持った人物を1人選び、その人物の視点からレポートを書きなさい。(注：フィクションを含まないこと)
- 案2** 「3つの視点(加害者的、被害者的、間に入る専門家的)で、その社会問題を説明しなさい」
- 案3** 「ドラマ中の転機について説明しなさい」
- 案4** 「取り上げた社会問題について自分たちが作ったドキュドラマの登場人物に新聞記者がインタビューをするという設定で、インタビューと返答を書きなさい」

### 5-3.ラウンドテーブルのまとめ

参加者による提案から筆者が得た「社会問題に関する最終レポートを書かせるための知見」は、3つあった。1つ目は、ドキュドラマ制作において、3つの異なる立場の登場人物を設定するために、多くの人物の背景を調べ、考えさせているので、その知識と理解の深さを利用すること。2つ目は、ドラマ中の起転結の「転」についての考えを問うこと、3つ目は、ドキュドラマで扱った社会問題について、誰かに説明することであった。

## 6.おわりに

本稿では、前半でドキュドラマという手法を用いた留学生対象の日本事情クラスでの実践を紹介し、ドキュドラマは多文化理解の促進が可能で、かつ学習者の語学スキルのみな



らず、アカデミックスキルも多面的に向上させることができることを論じた。

後半では、学習活動体験型ラウンドテーブルで、「社会問題に関する最終レポートを書かせる場合の、教師の具体的指示と水路付け」について、現職日本語教師から貴重なご意見をいただくことができた。

次の筆者の日本事情クラスにおけるドキュド라마の実践は、2010年度春学期になるので、今回得られた知見をうまく授業設計に組み入れ、社会問題に関する最終レポートを書かせようと思っている。そして、その結果をどこかで報告したく思う。

また、今回会場から、何をどのように評価するのかや、初中級クラスでドキュド라마を作らせる場合はどんなテーマが考えられるか等の質問が出された。可能であれば、来年度以降の実践フォーラムで、引き続きドキュド라마のラウンドテーブルを持ち、その中で議論したい。

本ラウンドテーブルにご参加して下さった皆様、日本事情へのドキュド라마導入のヒントをくださったインディアナ大学のハミルトン氏に、この場を借りて、お礼を申し上げます。

#### 注

- (1) 「起承転結」ではなく、「起転結」。筆者が、学生にとって「承」部分は考えるのが難しいと判断し、「起転結」でストーリー展開を考えるように指示をした。
- (2) 学生に「転」とは勢力の逆転のことであると指示。例として、強いものが弱くなった、わからなかったことが明るみに出たりすること等と説明した。

#### 参考文献

- (1) Joseph Trimmer and Sharon Hamilton (2004) “Docudrama Across the Curriculum.” Professional Development: Where are the Gaps? Where are the Opportunities? National Symposium on Arts Education. Montreal
- (2) 倉地暁美 (1996) 「異文化間教育学と日本語・日本事情の接点を求めて」『異文化間教育』第10号 異文化間教育学会 75-88
- (3) 横田雅弘(1996) 「留学生教育交流と異文化間教育学」『異文化間教育』第10号 異文化間教育学会 44-58
- (4) バンクス, J. A. (1996) 平沢安政訳『多文化教育』サイマル出版会